

戦前台湾における現地人布教—斗六教会設立

斗六教会の設立経緯

前回(1月号)に続いて、台湾の現地人(本島人)を主な布教対象とした教会の1つである斗六教会について紹介する。初代会長となる山田彦太郎は明治36(1903)年、26歳で台湾に渡り、台北で一時働いた後、嘉義県中埔庄に60甲地(約60ヘクタール)の畑を購入し、甘蔗園を運営していた。そうした中、大正4(1915)年に次男^{いわお}巖の出産後、産後の患いで妻クマが3日後に33歳の若さで出直してしまった。さらに、幼子である長男龍彦(5歳)、長女八重子(4歳)を抱え、母てよと共に子育てと仕事に励む中、台湾の風土病であるマラリアを患い、13回も入退院を繰り返した。医者から台湾では治療が困難であるため、内地に帰って治療をするように勧められたが、すでに日本での財産は全て処分して、台湾の事業に当てており、面目なく帰国もできず、長年の闘病で農園の仕事も人に任せたままで、台風等の天災による借財がかさんでいた。

このような人生の危機に直面した中、かねてより同じ内地人仲間としてたびたび尋ねて来てくれていた嘉義教会の吉田好蔵会長の導きにより、天理教に入信した。幼児と老母を抱えての彦太郎の布教生活は厳しく、働くとは今度胃病が起こって苦しんだ。しかし、これではいけないとまた仕事を辞めて布教に歩いた。そして、大正10(1921)年2月、渡台後、苦労を共にした母てよが出直したのを機に、吉田会長から斗六で布教せよと言われ、斗六での布教が本格的に始まる。昭和7(1932)年、初めて陳林宝、楊桂、陳幼という3人の台湾人女性を案内しておぢばがえりがようやく実現した。次第に信者が増え、教会設立の運びとなった。

昭和9(1934)年10月に教会新設のお許しを頂き、山田彦太郎を会長として斗六駅近くの斗六街斗六6168の3番地にて11月15日に盛大に開筵式を施行した。教会設立の後、教勢は日の出の勢いの如く進展した。

斗六教会の現地人布教

昭和11(1936)年の巖と張歹の別科入学に続き、翌年には黄深淵、鐘西己、程午屎、程天章等々が別科に入学、おぢばで6カ月の修養を終え台湾に帰るや、それぞれが単独布教に出かけるようになる。

張歹は夫妻で斗南布教所を設立。西螺に母と布教に出た黄深淵が西螺布教所を設立。西螺の部内の程天章が崙背布教所を、鐘西己が麻豆布教所を、程午屎が埔姜崙布教所を設立。梅山にも信者が増え、初代会長が再婚した妻リンを担任として梅山布教所を設立。次男巖が布教に出た北斗には詹知高を担任として北斗布教所を設立した。

おぢばで育てられた龍彦は、現地人の信者子弟におぢばでの勉

学を勧め、張廷燦、張廷昭、高萬益、張仕堂、張炳曜、廖貴極、廖滿堂が次々と天理中学校に進学した。当時、台湾から内地留学するためには多額の費用はもちろんのこと、内地の学校の情報や人脈が必要であったことを考えると、台湾の農業地帯で生活していた信者の子弟の内地留学は、天理教入信によって可能となったと言えるだろう。この少年たちは天理中学校を卒業し、台湾に帰ってから公務員や商店経営などの仕事に就き、社会的にある程度の地位を得ていたため、後に引き揚げることを余儀なくされた教会が再び台湾で復興される際に、力となってくれた。

また、日中戦争が始まると愛国少年団員の募集があり、教会信者の子弟である韓進和、楊再坤、周春旺、温金水が団員として中国大陸へ送り出された。

斗六教会の教会移転と引き揚げ

斗六教会は現地人による布教所の設立によって、台湾中南部の広い地域で活発に布教活動を展開し、信者が増え続けた。そのため祭典日には参拝場に入り切れず、より大きな教会の建設を望む機運が高まり、それに相応しい土地を探した。そして、斗六街社口92-13番地に1400坪の土地を購入し、昭和16(1941)年4月に地鎮祭を執行する。しかし、同年9月13日に主となって教会を支えていた長男龍彦に召集令状が届き、その当時は出征が秘密とされていたため、人々に知らされないまま入隊することとなった(のちに戦死)。その後は次男である巖を中心として、東西10間、南北6間の木造瓦葺の神殿が完成、昭和17(1942)年7月に神殿落成奉告祭を盛大に執行した。

神殿の他にも教職舎として会長家族、住み込み人家族の家、さらに信者棟も建ち、病人を担架に乗せて家族が共に泊り込みご守護が頂けるまで住み込むこととなった。来る人達は次々と入れ替わって、皆、不思議なご守護を頂くことができた。そして、ほとんどの人がおぢばがえりをして、おさづけの理を拝戴する事を心定めにした。お金がなければ泳いでも帰らせて頂くほどの強い決心をするようにと、諭されたようである。そのため4月と10月には30人から50人の別席団参が毎年続いた。昭和14(1939)年11月には台湾の嘉義東門教会と斗六教会、さらに北京の崇文教会の3カ所に対して海外布教の功勞により海外伝道部から褒章が授与されたことから、教会設立からまもない斗六教会が熱心に現地人布教に励んでいたことがわかる。

しかし、昭和20(1945)年8月15日に日本は敗戦した。敗戦後も初代会長の台湾への思いが強く、帰国の思いは念頭になく台湾在留を強く希望していたものの叶わず、教会の後始末も十分にできないまま昭和21(1946)年4月に引き揚げることとなった。